

鳥取畜産農協/東部コントラクター  
中山仁志 さん

## 鳥取畜産農協と大学生協の接点

今回は「名和会長のインタビュー」の最終回です。  
前回の戸田さんに続いて学生委員体験者のお話になりました。一緒に活動した以前の学生さんが素晴らしい社会人になってインタビューに応じてくれました。  
中山さんは学生時代から大人の間にお持ちだと思ってきましたが、今回もそう感じました。大学生協にかかわり、弱点のいくつかは協同組合間協力だと思ってきましたが、それを実践している中山さんに大きな可能性を見出しています。



名和 前回のインタビューで登場いただいた戸田幸典さんとは世代が少し違うと思いますが、中山さんは学生時代に大学生協の学生委員としてさまざまな活躍をされ、当時の京滋・奈良地域センターで活動をご一緒したなという思い出があります。

中山さんは京都工芸繊維大学卒業後、東京の外資系 IT 企業に就職され、数年を経た後突如変身をとげられ、鳥取の限界集落へ行かれるという、風変わりな転職をされたわけですが、わたしはそれがおもしろいと思っていて、大東京は知っているし鳥取の過疎地といえば地元の方には失礼ですが地方にも関わっておられる。昨年秋に、地域センターの学生事務局として共に活動しておられた島岡緑里さん、中谷志帆さんと鳥取を訪問させていただいたときに、中山さんや「地域おこし協力隊」で活動している渡辺萌生さんたちにお会いして『こんな若い人たちが頑張っているんだ』と強い印象を持ちました。そういう人たちの目には、これからの地域や農業がどう見えるかということに興味関心があります。これはわたしだけでなく多くのかたも同じだと思い、今回のお話につながりました。そこでまず、中山さんがどこで生まれて、幼少年時代をどう過ごされたのか、お伺いしたいと思います。

中山 当時の京都府船井郡園部町（現・南丹市）で生まれ、父は岡山県出身、母親は京

都府瑞穂町（現・京丹波町）の生まれで、共働き家庭で育ちました。両親の通勤圏内という理由で、園部町は昔から住んでいたわけではないので祖父母がいるわけでもなく、姉、弟と親子5人で暮らしていました。幼少時は明確に意識することはありませんでしたが、中学、高校時代は自分の存在がふわふわしている気がしてアイデンティティについて考えることも多く、コンプレックスが少しずつ支配していきました。そうしたなか大学進学を契機に理想の自分になりたいという思いのもと、大学入学後、大学生協に縁もあったしバイト、サークルなどやれることは何でもやって、見事に大学デビューを果たしました。

## 「土着」への憧れ

名和 自我の目覚め、自分とは何者かについて意識したということですね。その幼少期田園地帯で育った思い出、土地や人に関わったことなどお話しください。

中山 まわりの友達には「自分の」田んぼ、畑、山、祖父母があるのがふつうですが、それにひきかえ自分は基本的に家族だけで完結していたので自分には横の広がり、縦の歴史がなかった、今思えばそれが、自分がしっくりこなかった理由だと社会人になってあらためて思うようになりました。田舎の土地や歴史を自分に取り入れたくて今、鳥取に来ているのだと。わたしは「土着」という言葉を気に入ってよく使いますが、土と共にくっついて湿り気のあるコミュニティの一員になることに恋焦がれていたのだと思います。今はそういった環境に満足していますが、ただ同時に田舎の土着性質は現代において誰もが持つ自由に生きることができるという生き方を阻害するという、田舎ならではのマイナス面も実感することがあります。

逆に、東京は土から完全に人を切り離してどう発展し、個人個人が可能性を見つけるかという街なので、東京での経験は自分の世界を広げてくれる貴重なものでしたが、個人として自立するには土に立つことが必要でした。それは幼少期からつながっていたことだと思います。

名和 面白いとらえ方ですね。意外と言え、農村で育ったが在地の農民ではなくよそ者としての違和感を持って育ち、就職で東京に行ったけれども、その後鳥取に移ることは不自然ではなかったということですね。

それでは大学生協に入ったきっかけからお話してください。

中山 高校の頃から大学に入ってから色々なことをしたいと思っていたので、生協だけでなくサークルにも入りましたし、教員になるための教職課程の勉強もしましたし、そのなかでたまたま工織大生協の学生委員になったということです。大学のテニスサークルの友人と大学生協の友人とはまったく人種が違うということが刺激的に感じた記憶があり、異なる世界に関わることは自分にとって大事な要素でした。その頃から欲張り精神が旺盛でやりたいこと全てががんばるスタンスになりました。

名和 チャレンジ精神が旺盛だったのですね。大学生活で一番印象に残ったことは何でしょうか。

中山 大学生協学生委員会で共済の活動を1回生から4回生まで続けました。まるで専従さんみたいに4年間、共済活動一筋です(笑)。4回生での地域センター事務局活動で職員事務局の横山治生さんや坂倉楓さん、芝田考一さんからも共済や大学生協について多くを教わりましたが、共済に対する当初の思いは複雑でした。当時、保険会社の保険金未払い問題がマスコミでも取り上げられており、



私が共済制度についての説明を受けた時に、『助け合いというけれど保険と同じではないか、なぜ綺麗ごとを言うのか』という思いがあり強い反発を覚えていました。なので入学した当初は共済に入りませんでした。そのあと、坂倉さんのお見舞い活動のお話を聞き「共済」を改めて学ぶことで本質を理解でき、共済という仕組みが「お金」と「思い」の両方を、一見相反するばらばらに見えるものでも組み合わせることによって大きな力を発揮するという「共済」の魅力にとりつかれたわけです。またそうした共済との関わりを通して大学生協や協同組合を深く理解することができました。

名和 地域センターでは2007年に島岡緑里さん、筒井景子さん、中谷志帆さんとの4人体制で活動されていましたね。最も思い出に残ることがらは何でしょうか。

中山 当時地域センターには先輩から引き継いだ10個のテーマがあり、それを深め、次の代に引き継ぐことを事務局メンバーで決意し、取り組んだ一年間の濃さは今になっても色褪せません。女性メンバーの強さ、パワフルさを思う存分目の当たりにし、女性には逆らわないという今に至る人格の基礎ができたのもこの頃です(笑)。

活動自体に後悔はありませんが、無力感を感じた出来事としては、4年生の時、大学生協の全国組織が分離してあらたに大学生協共済連合会ができるということがありました。全国の会議などにも関わる中で、そうした市場開放に向けた資本主義の動きが政府や海外からの働きかけによってなされているということを肌で実感し、それに対して熱い想いはあってもこの期に及んではどうすることもできない、という「手遅れ」になる前の行動が大切だということを痛感しました。

## 「OPO」の世界に

名和 そういなか東京で就職されたということは生協に対してある種の違和感を持っておられたということでしょうか。

中山 わたし自身、協同組合というしくみは優れたものであると感じており、それで現代社会の問題を解決したいと思っていました。先日、戸田さんのインタビュー記事

を見せていただいて、より良い社会のために戸田さんはNPOの道を選ばれましたが、私は、ある方が利益ばかりを追求する組織を揶揄しておっしゃった「OPO」=Only Profit Organizationという造語があるんですが、逆にOPOの世界に興味を持ったわけです。大学生協は、事業活動と組織活動、たとえば食堂や購買事業と平和活動などを両立してとりくんでいることが大きな魅力ですが、わたしはまず自分の足で立って稼ぎたいと思ったわけです。もっとも、都会への強い憧れで、東京で働きたかったということもありましたが。つまり生協に反発して行ったというより、最終的には協同組合に戻ってそれを生かしたいという気持ちでした。幸運にも就職した外資系企業は稼ぐことに真摯に向き合っている人たちばかりいる組織でしたし。

名和 会社組織と協同組合組織とでは違いがありますね。そこで何を体得しましたか。  
中山 資本主義社会のもとでNPOとOPOは対立的にとらえられますが、会社と一緒に働いていた部署の人たちはお金をたくさん稼いでいて、3・11東日本大震災その他の自然災害の都度、現地にボランティアには行けなくても個人も会社もあたりまえのように多額の寄付をしていました。もちろん多額の納税もします。そしてそうしたお金がNPOなどいろいろなところにもまわっていくわけです。下の方でお金という形で資本主義システムが循環しているのに、表面では対立する構造になっていることに違和感を覚えました。ちゃんとつながっていてひとつのシステムとして回っているのに、お互いにコンプレックスを持っているからなのか、人同士の理解は進んでいない。

人は、お金が目的の時もボランティアの時も一生懸命働きます。目的の差はあったとしてもそこには助け合いや協力関係があって決してドライではありません。私自身が当時本当にたくさん周りの方に助けて頂いたので間違いありません。お金を稼ぐということは、一生懸命働いた成果が、お金という価値で返ってくるというだけです。生きるとはそういうことでもあるし、そういう人たちの中で働けたことは恵まれていたと思うし沢山のことを学びました。もっともっと二つの世界が融合していければいいのという想いを強くしました。

名和 それは個別の組織の問題だけでなく社会のものの見方がそうになっており、偏見も多いということでしょうか。戸田さんも同じことをおっしゃっていました。中山さんはリアリスティックな見方をされていますね。人間は往々にして自分の殻に閉じこもることが多く既成事実しか見ないことになりがちですが、より自由になれるはずだと思います。

## 協同組合間連携に共鳴して

名和 鳥取に移って驚いたこと、予想と違ったことなどありますか。地方には若い人がいないなどといわれますが。鳥取に行かれる動機はどういうものでしたか。

中山 なぜ鳥取にということかというと、学生事務局のときに「大山乳業酪農インターンシップ」に関わり参加したことがあり、その時お世話になった酪農家さんに東京から出て新しい道に進もうと決めた時、2週間お世話になりました。そのとき鳥取県畜産農協組合長の鎌谷一也さんとお話したのがきっかけです。しかしその時は今住んでいる志子部という限界集落は知りませんでした。強く抱いていた協同組合に関わりたい思いはありましたが既存の農協や生協には違和感を覚えていて、というのも現在の協同組合は規模拡大に走り、また市場の波にさらされ本来の協同組合の意義や強みを見失っている部分があるのではないかと思っていました。そのため既存の協同組合に就職したいとは思いませんでした。



そんな中お話を伺った鎌谷さんは「協同組合間連携」をすすめて、消費、流通を担う生協、生産を担う農協、漁協、森林組合などが連携してコミュニティを強め、生活を守ろうとされていることに共感し、自分の進めたい協同組合の形が見えました。今の日本で一から理想の協同組合をつくるというより、自分が関わり、今あるものを新しい

価値観のもとに連携させていくことに大きな魅力を感じました。そこでどこに住むかというときに、すでに若い人たちがいる限界集落に入っていると聞き、その日のうちに集落に行き、そこで総務省所管で3年任期の「地域おこし協力隊」として2年前から活動している渡辺さんや平賀さんを知りました。二人と集落の方々が苦労して築かれたチャレンジングなコミュニティに運良く乗っからせて頂いた訳です。

今私が住んでいるところは補助金でできた建物ですが、これまで公共事業のからみで「ハコモノはいらない、無駄だ」などという意見に共感することもありあましたが、今のわたしがいるのは雨風をしのぐハコモノがあったおかげであり、鳥取県の平井知事には大変感謝しています。ハコと中身どっちが先でも、常に両立するよう動き続けることが大切だと改めて気づきました。そのハコのなかで今まで自分に欠けていた「土着」というものを集落のなかで築こうと生活しています。

わたしとしては限界集落課題の解決というプライベートのライフワークの上で仕事としての協同組合間連携に関わるということで、鳥取での生活において、プライベートでは限界集落という小さな自分のコミュニティを守りたい、また仕事では地方のコミュニティを協同組合という仕組みで守りたいといったように、生活の目的がひとつにまとまってすすんでいます。東京にいた時の「営業として認められたい」、しかし「根本ではお金に固執したくない」というようなちぐはぐなモチベーションでなく、今はひとつになって活動できるのがありがたくやりがいがあると思っています。

名和 鎌谷さんは鳥取の協同組合運動のリーダーとしていろんな知恵を発揮して活躍さ

れていますが、県政と一緒に運動をすすめられたり、中国の研修生を長期間受け入れ、交流も活発におこなわれていることにあらためて鳥取がもつパワーを感じています。そういう鳥取に中山さんがいくということは面白いと思っていました。

わたしが気になるのは日本の過疎地のありかたであり、農業従事者がこれからどう暮らしていくのか、どのように助け合いをしていくのかということです。ある意味では過疎地や農村は落ちるところまで落ちたといわれますが無くなる事はありません。1億以上の人間が生きている日本で、もし農村がつぶれれば大都市もつぶれてしまうでしょう。地方創生だとかきれいな言葉が交わされますが、足を地につけたかたちでの農村、過疎地の維持をはかることが求められていると思います。そういうなかで中山さんとして何ができるか、何をやりたいのかについてお話を聞かせてください。

## 仕事のなかの癒し

中山 鳥取に来て1年余りなので考え方も日々更新しているような状況ですが現在の思いを述べたいと思います。話が少し飛びますが、かつて東京で営業職として働いていた時は毎日、日経新聞を熟読していました。読まないで上司に怒られますから(笑)。それで読むことが習慣となっていました。鳥取に来てからも携帯で「電子版」を読んでいます。鳥取へ来てからのほうが日経新聞の意図が読み取れ面白いと感じます。かつて実家で朝日新聞を読んで、大学では読売新聞など他紙も読む機会があり、それらの比較からすると当時日経新聞は何とニュートラルなのかという印象を受けていました。

ところが地方に来て、地方の価値観と日経新聞の価値観とに根本的な差異があることを実感しました。東京では効率だとか資本主義の発展、「より稼ぐ」ためにどうするかという議論になりますが、その人たちが地方のことを一生懸命考えても無理だなど。都会で育って、もしくは都会の価値観に憧れて官僚になった人たちが異なる価値観の上に生じている地方の問題を読み解くことができない、東京の価値観や方法論しか持ちえない限界があるのではないかと、と思っています。最近盛んに地方創生といわれていますが、国の中枢は、いわば日経新聞の見方で地方創生を考えるということです。それでは地に足をつけたものになるとは思えません。日経新聞はある意味、「相手」を知ることに大きく役立っています。

それでは地方は過疎化や産業の衰退などの課題に対し何できるかということですが、それにはどこでも見聞きする、出て行く若い人を減らし、新しい人を呼び込む、併せて農業を復興させる必要があります。まず若者を呼び込むことに関しては、地方では都会に比べお金をそれほど稼がなくても生きていけるという現実があります。田舎の生活は、都会のお金とサービスの交換という形ではなく、生産物や労力の交

換で成り立っている部分がたくさんある。東京で月何万円も払ってジムに通って消費するカロリーを、農作業の手伝いや雪かきといった田舎での若い人手に置き換えれば、独り身であれば空いた時間アルバイトの現金収入を加え十分充実した生活をしていけます。また地方の産業である農業や畜産・酪農で共通するのは、植物、動物という生き物を相手にし、自然の中でそれらを育てて恩恵をいただくという<sup>なりわい</sup>生業ということです。前職の営業職の時の相手はお客さんである人や会社であり、資本主義の社会のしくみのなかで関係を築いてどう利益を上げるかが目的でした。「農業」と「営業」を比較すると、農業の仕事のなかには潜在的な「癒し」が圧倒的に多いと気付かされます。サラリーマンであればアフターファイブや日曜に気晴らしをし「癒し」を求めることも多々ありますが、農業では、厳しい天候から一転いい天気恵まれて嬉しい、酪農なら、牛にえさをやって美味しそうに食べる反応が嬉しいとか、そういうところに少しずつ癒しがあります。単純に重労働といったイメージや収入の額で田舎の生活を捉えるのではなく、そもそもの地方の生活におけるお金の意味や、仕事の内容を含め生活の質をトータルでみると、地方での生活や農業は今の若い人たちにとって魅力的なものだと感じるのではないかと思います。

## 「トトロ」の情景

中山 次に日本の農業についてですが、これまでの日本の農業は衰退産業だ、経済的には儲からない産業だといわれ続け、農業規模を大きくして儲けるという東京の価値観の延長線上が成功だといわれるが、そうではありません。なぜなら、そのような規模拡大の先には、例え地方が活性化したとしても、日本人の心に染みついているジブリ映画の「となりのトトロ」のような田舎の情景は消えて無くなります。

そこで大切なことは農業のもつ多面的機能に注目すべきだと思います。田んぼのきれいな「あぜ」というのは、真夏の日差しの下、何度も草刈して管理されているからであり、それを可能にしているのは農家の方が意識する「他人の目」です。先祖代々の自分の田んぼが荒れるのが恥ずかしい、そのためにはお金をもらおうがもらまいが自分がやらねばならない。そういうしくみであのきれいな風景が保たれているわけです。農業の役割を多面的にとらえ、農業保護のための補助金一つをとっても田舎の景観、山の管理・保全を考慮しコスト比較をすれば、また地方のしくみは生きてきます。その意味でわたしは農業の経営的な自立をめぐる構造的な問題は必ずしも大きくないと思っています。

名和 農業というのは人間が生きていくことと直結している仕事です。それをお金の価値だけでとらえることはできません。以前、奈良で<sup>はるみち</sup>治道トマトを栽培しておられる堀内金義さんから「東京から農業が消えた日」という本を薦められ読んだことがあります。戦後日本の農林省（当時）はアメリカから農業を学んでそれをそのまま日



本に移植しようとしたが、それがどれだけ大きな間違いであったかということです。先ほどいわれた日経新聞的なもの見方の問題です。田んぼで実際に働いたことのないような日本のエリート官僚がアメリカに留学しアメリカ風の大規模農業を学んで帰ってきてそのまま日本で実践しようとしたわけです。農業にかぎらず日本の戦後社会はそのようにして動いてきました。もちろんそのバックにはアメリカ政府の存在がありました。

日本独特のスタイルであった「三ちゃん農業」も今から考えれば日本に適したやり方だと評価すべきだったかもしれません。もっとも広大な農地をもつ北海道であればアメリカ的なやり方でやればいいわけですが。かつて日本人は田舎を捨ててみんな東京へ向かう時代を経験しましたが、今から考えると間違っていたのではないのでしょうか。田舎で農業に従事している人がみんな貧しかったかといえばそうではなく中には何代も続く農家がものすごい資産を持っていましたし、篤農家といわれる、農業を大切にするひとたちが日本の農業を支えてきたともいえ、その底力にはすごいものがあるといえます。

現在の社会がこれだけ大きく動いているなかで農業もまた変化していつているわけですね。北海道の「共働学舎新得農場」を運営されている宮嶋望さんがアメリカで酪農学を学ばれたあと、模倣ではなく日本に適応した酪農をすすめられ、ハンディをもったひとびとと一緒にチーズづくりをされているすばらしいとりくみを思い出しました。

ところで中山さんは普段どのように仕事をしながら過ごしておられるのですか。

## 飼料イネの循環システム

中山 まず仕事の全体像ですが、現在働いている株式会社東部コントラクターの親会社である鳥取県畜産農協(鳥畜)では、大山乳業の組合員でもある酪農家さんの高齢で乳が出なくなった牛の肉としての加工やその肉の販売事業、また乳牛から生まれたオス牛の肥育事業を行っています。また鳥畜では食料自給率の向上を目的に平成13年から京都生協との産直事業の一環で、食品残渣や飼料稲を飼料として活用した牛の肥育、肉の販売を始めていました。その翌年の平成14年よりWCS(ホルクroppサイレージ: 稲発酵粗飼料)の生産、販売組織として鳥畜内に東部コントラクターが組織され、牛の糞尿を堆肥にし、その堆肥を利用して飼料イネをつかって牛に食べさせるかたちで回していく循環型システムを担っています。その後、堆肥処理、飼料イネ栽培、WCS生産を行う独立した鳥畜の子会社として現在に至ります。

そもそも食料自給率向上を目的にスタートした取り組みではあったのですが、長らく続く輸入飼料の高騰による自給飼料需要の高まりで、耕作面積が急拡大してき

ました。それに加えて、近年、耕作放棄地がどんどん増えている実態があります。鳥取でも現在老人ホームの建設ラッシュで、大小さまざま、なかには大変高級なものもあります。これは入居する高齢者がそれまで管理していた土地を手放したことを意味します。それに加え、JAによるコメの買取価格がどんどん安くなり作っても赤字という状況です。そうしたなか飼料稲の存在は稲作農家側から注目が高まってきており、畜産・酪農と農業の両方において大きな役割を担うことが期待されています。東部コントラクターのやることは稲作農家と同じで、飼料イネの品種の苗をつくって田植え、管理、刈り取りまで行い、それを酪農家へ飼料として提供します。その後、堆肥を田んぼに返し次の年の飼料イネ生産に備えます。現在鳥取県東部で200ヘクタール弱（東京ドーム約40個の面積）の田んぼに関わるまでになっていません。規模でいうと小さな農家さんが一生かかっている田植えの総面積を1、2年でやってしまうようなこととなります。

わたしはふだん月曜から土曜の朝8時から夕方5時までそのような仕事をして、日曜は地域おこしで来ている渡辺さんと集落の寄り合いに出たり、鳥取市の家族を限界集落での里山体験プログラムに受け入れたり、県外からグリーンツーリズムに興味のあるお客さんを受け入れたりしています。夜はパソコンでイベントのチラシや来年度計画を作ったり、事務作業の毎日です。



名和 鎌谷一也さんのお父さんの鎌谷広治さんがお元気な頃

『有機、大型畜産の農業が必要』と語っておられて、すでにその段階で飼料イネのこともおっしゃっていました。地域の農業全体で回すことが大切なんですね。ただ、わたしはこれだけ早く過疎化がすすむとは考えられませんでした。

中山 現状では耕作放棄地が広がるスピードに飼料稲の面積が追いついていません。その一方で酪農家そのものの減少によって飼料稲を受け入れる総量が減少してきているといった構造的な問題があります。そうしたなか、現在は輸入に頼っているトウモロコシを自分たちでつくることを目指したり、また酪農を含めた地方の農業自体の復興について協同組合間連携の仕組みを使い大きな仕組み作りを進めているところでは。

このような地方での取り組みを進める上で、今の日本の方向性の違いを強く実感します。その大きな要因は、日本がこれまでのアメリカ追随から、一歩踏み込み、むしろ心身ともにアメリカになろうとしているように見えます。そういった中で、日本の自立にとって必要な地方の自立に向けて鳥取で刺激的な毎日を過ごさせて頂いています。

名和 中山さんが今考えておられる課題はどんなことでしょうか。

## 「学びと成長」を支えるコミュニティ

中山 いま地方で一番の問題として思うことについて少しお話します。

鳥取は日本で一番人口の少ない県であり、また人口減少が今なお進行している状況で、外からの IJU 者 (I ターン、J ターン、U ターン者) 獲得に力を注いでいます。

「よそ者、若者、バカ者」を重宝しようとするのですが、その一方で一度も外に出ない、例えば高卒で地元就職といった O ターン者が死角になっている現状に気付かされます。「地方創生」が東京ではなく当事者の地方にとって実りあるものになるかどうかは、そういった地元に残った若者の参加が必要不可欠じゃないかと、考えるようになりました。



また、この O ターン者には就職氷河期で満足な雇用を得られず今に至る世代や、横並びの大学進学に疑問を持ち、その後のキャリアを積めずにいる若者も多く、そのように厳しい状況のまま社会のなかに組み込まれて定着してしまっている現実があります。そういうシステムをどうするか、将来性のあるシステムにどう移行していくかが問われています。もっ

とも当事者である彼ら自身は現状の生活以上を望んでいないかもしれませんが、地域に残っている人たちが夢を持ってコミュニティの一員としてかかわり、学びと成長があり、そこにサポートできる組織や地域社会をつくることも「地方創生」には必要な事だと思います。ただ現状、O ターン者の日々の生活を充実したものにする役割は、連日盛況な数え切れないほどのパチンコ屋が立派に担ってくれています (笑)。

名和 パチンコはすべてダメというわけではありませんが、現にギャンブル依存症に陥ったり、結果として家族や友人など大切な人を失くしてしまっている深刻なケースが多々ありますね。

そうして見てみると日本社会は崩れかけているということがいえるのではないのでしょうか。中国語では「向銭看」といいますが、金のことばかり見ているという意味です。現に今の中国ではそうなっているし、日本でも同様です。しかも大人だけでなく子供までもがお金の尺度だけものをを見るというように。人間にとって大切なことは、「働くことは学ぶこと」を理解することではないのでしょうか。人間が働かなくなればかわいそうな存在になりますね。中山さんはそういう人たちの生活をどうサポートすべきかについて考えておられるのがよく理解できました。

中山 現在鳥取内外から地域おこし協力隊の活動や NPO として入ってくる人たちは、案

外そういう人たちと接点がないというのが現状です。同じ`高い`意識を持った人たち同士はひとつに集まって活発に活動しているが結局はその世界にとどまっているということです。わたしも東部コントラクターに就職して、職場の同僚の話や仕事の関係でハローワークに行ったりしてはじめてそういった方々の生の姿が見えてきました。彼らは現時点では政府や地方行政、また NPO が照らす「地方創生」のスポットライトを浴びることのない存在であるということです。

名和 農村部や地方で、地域経済がだめになったとっては「大きな工場に来てほしい」「雇用がほしい」という話になりがちですが、それは発想が逆立ちしているということではないでしょうか。お金さえ気にしなければ多様な雇用はあると思います。それを、高い給料をもらって良い労働条件が保障されるかどうかなど、地方創生といえどもそういう話になってしまっていますね。中山さんのお話を伺って共感できるところがたくさんありました。こうしてみると、中山さんや戸田さんだけでなく学生委員を経験された多くの方が、社会でさまざまな面白い活動をされているなど実感します。

### 協同組合経験を社会に活かす

名和 ところで中山さんの転職についてご両親はどう思われたのですか。

中山 もちろん親は心配しました。前職の辞め方からの話になりますが、東京生活で当初、私自身東京での仕事の引き際がわかりませんでした。何としても東京で何らかの結果を出して帰りたかったのですが、自分より賢く、人間的にも大きな方々が必死になっている職場で、営業職として大切なモチベーションである「お金」がしっくりこない自分が居続けることは無理だと悟りました。ただ、私の成長を信じて公私ともに気かけ、サポートして頂いている職場の方々には何とか報いたいという気持ちは強まり、そこで体が拒否するまで必死にやろうということにしました。そうした行き詰まりを感じながらも仕事をしている中、3・11 が起こり、オフィスのあった26階でコンクリートのビルがゴムのように大きく揺れ動く体験をし、大混乱の東京を歩いて帰宅し、繰り返される津波の映像に釘付けになる日々を過ごしました。この体験で東京という仮想的に作られた街の弱さ、そこで生きる自分を含めた人の生物としての弱さを思い知りました。

そしてある朝、『もう出勤は無理』という状況になり病院で診察を受けました。医者から『人間は防御反応として自分で自らのブレーカーを落とす』ものだといわれ、東京生活の引き際を決意しました。もともと30歳を転機と考えていたので東京の会社を辞めて鳥取で働きたいというわたしに対し、親から見ると当然心配で『農業をしたいなら鳥取でなくても実家近くにたくさん場所はある』とさんざん言われましたが、協同組合間連携の話などをして無理矢理納得してもらいました。考えれば、

学生事務局時代にも当時の活動内容について一度も親に話をしませんでしたし、ろくに家にはいないという状態だったので心配に対する免疫は当時からできていたのかもしれない。当時、12月の地域センター総会に学生事務局全員が親を呼んで、自分が1年間何をしてきたかを見てもらってようやく理解してもらったことがあったのを思い出し、今回も鳥取の志子部集落に親を呼んでイベントに参加してもらったり集落の方に挨拶したりしてようやく気持ちの折り合いをつけてもらいました。今では逆に両親を鳥取に引き込めないか画策中な程です（笑）

名和 現在の学生委員のみなさんに対してひと言お願いします。

中山 学生事務局の時代の1年間は学生と社会との貴重な接点であったし、単にカネを稼ぐということでもなく、単なる一学生という存在でもありませんでした。社会人になり、東京でも、鳥取でも仕事をする上で、当時であればどう考えていたか、事務局メンバーとのやりとりを思い出し、チームはどうあるべきか、ということを考え行動することがよくあります。同期の学生事務局、職員の方々、先輩に恵まれ、感謝ばかりです。今ふりかえっても、やろうと思えば何でもできる時代でした。



今の学生委員の皆さんも、目の前の組合員である自分を含めた学生をしっかり見据えながら、大学生協のもつ連帯をすすめていけば、貴重な学生生活になると確信しています。またそうなるように、大学生協との鳥取の産直の仕組みを使い、私自身もなんらかの形でサポートし、大学生協に少しでも恩返しができればと考えています。

これまでそうであったように、協同組合を経験した若者が社会に次々とは、日本だけでなく世界にとって大きな意味を持つと信じています。自分も協同組合に出会い、東京で貴重な経験を積ませて頂いた恩返しに、そうなれるよう決意も込めて！

名和 私自身も大学生協の活動を通してさまざま学んだり、鳥取の鎌谷さん、北海道のみなさんと知り合いになったり、たくさんの貴重な経験をさせていただきました。現在の学生さんの欠点は、社会の実際を見る場が足りないことだと思っています。学生さん自身も、もっといろんなことを学ぼうという気持ちを抱いてほしいですね。そのお手伝いで、大学生協がその機会を提供していければと思います。

本日は大学生協の先輩でもある中山仁志さんから、学生組合員をはじめすべての生協関係者にとって励ましとなるお話をいただきありがとうございました。

(3月28日 新・都ホテル ラウンジにて)